

【巻頭言】

四次元生命体を求めて



河口洋一郎
東京大学

銀河が1周するのに2億数千万年かかるので、太陽系が生まれて46億年なので、まだ20数回転しかしていないのだ。5億7千万年前から5億1千万年前あたりのカンブリア紀に爆発的に生命の種が増えた。多くの奇抜な新種生命体が生まれ、絶滅した。まだ地球生命体は進化の途中である。

時間の流れはあまりにも短い。あと4億年もすると、地球上は二酸化炭素の比率関係で、植物の絶滅が始まり、必然的に動物の大量絶滅が始まる。ただ地球を脱出するには、光のスピードがあまりにも遅過ぎる。光がこの楕円銀河系の端から端まで旅するのに10万光年もかかるのだ。銀河中心を上り下りするにも1.5万光年もかかるのだ。

どこか他の恒星にある不毛の惑星を探したい。できたらそこに自己組織化する人工生命体の種を打ち込んでみたらどうなるだろう。2億年もあれば十分な人工生命体の自己増殖が可能にな

るかもしれない。

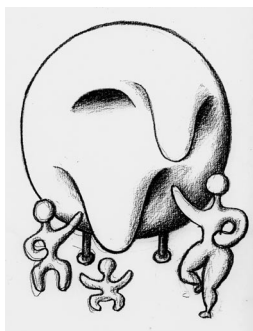
3次元宇宙を曲げて、4次元的に自由に生きながらえる生命体を図像化できないだろうか。自らうごめき、形態変化、色彩変化を可能にする四次元生命体の宇宙図鑑をつくってみたいものだ。

アートはサバイバルなのだ。四次元宇宙は生命体にとっては無限の生息空間である。

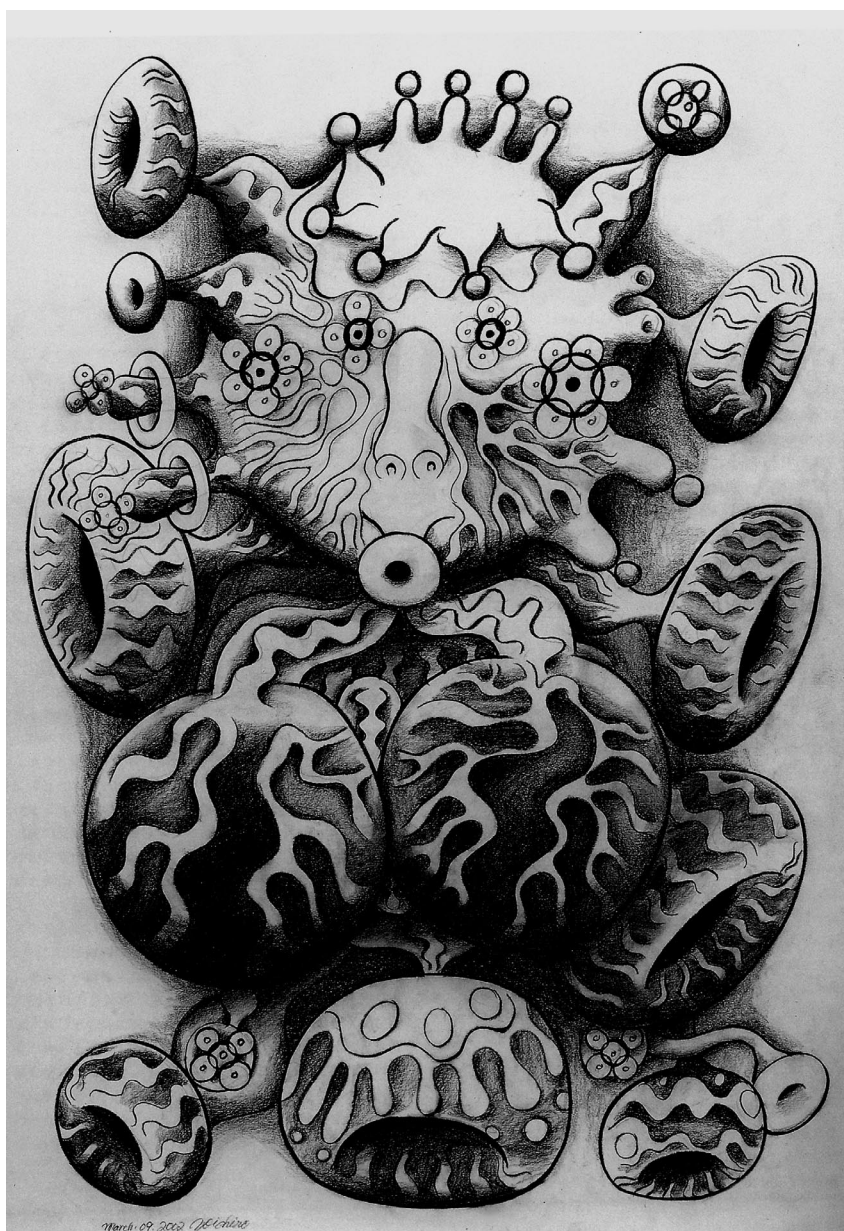
〔略歴は58ページ〕



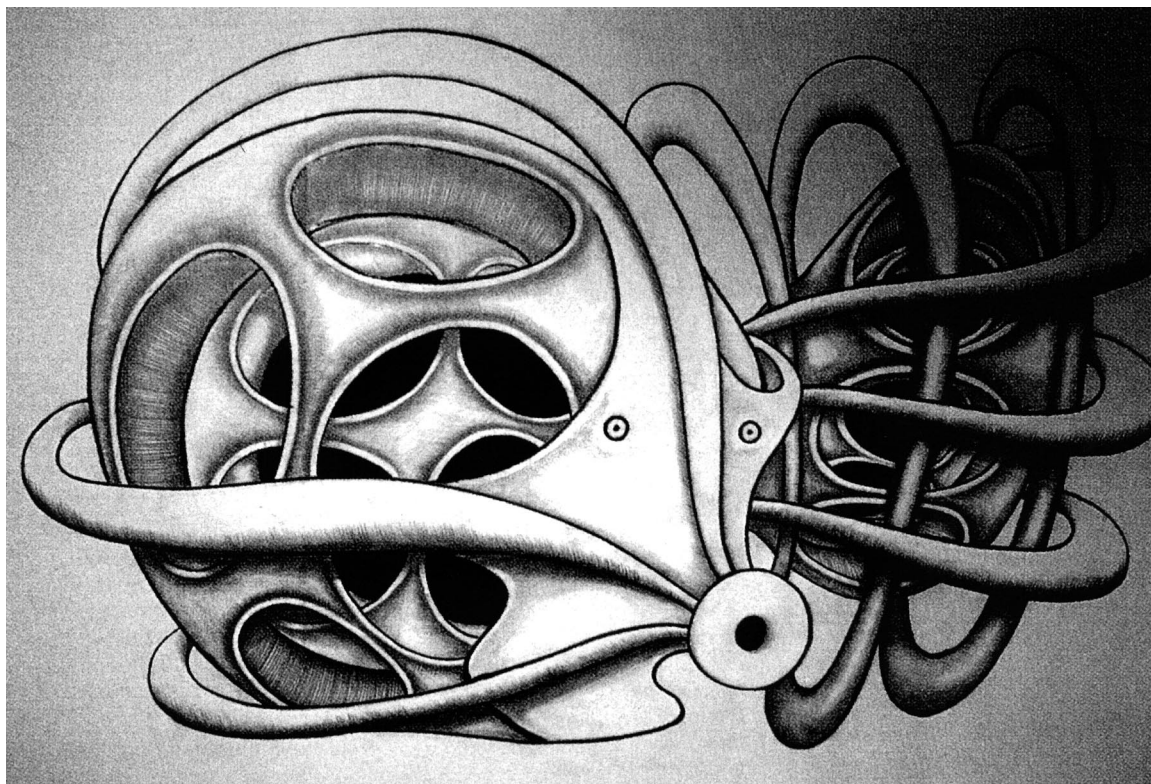
「ジェモーション」
スクリーンは生き物



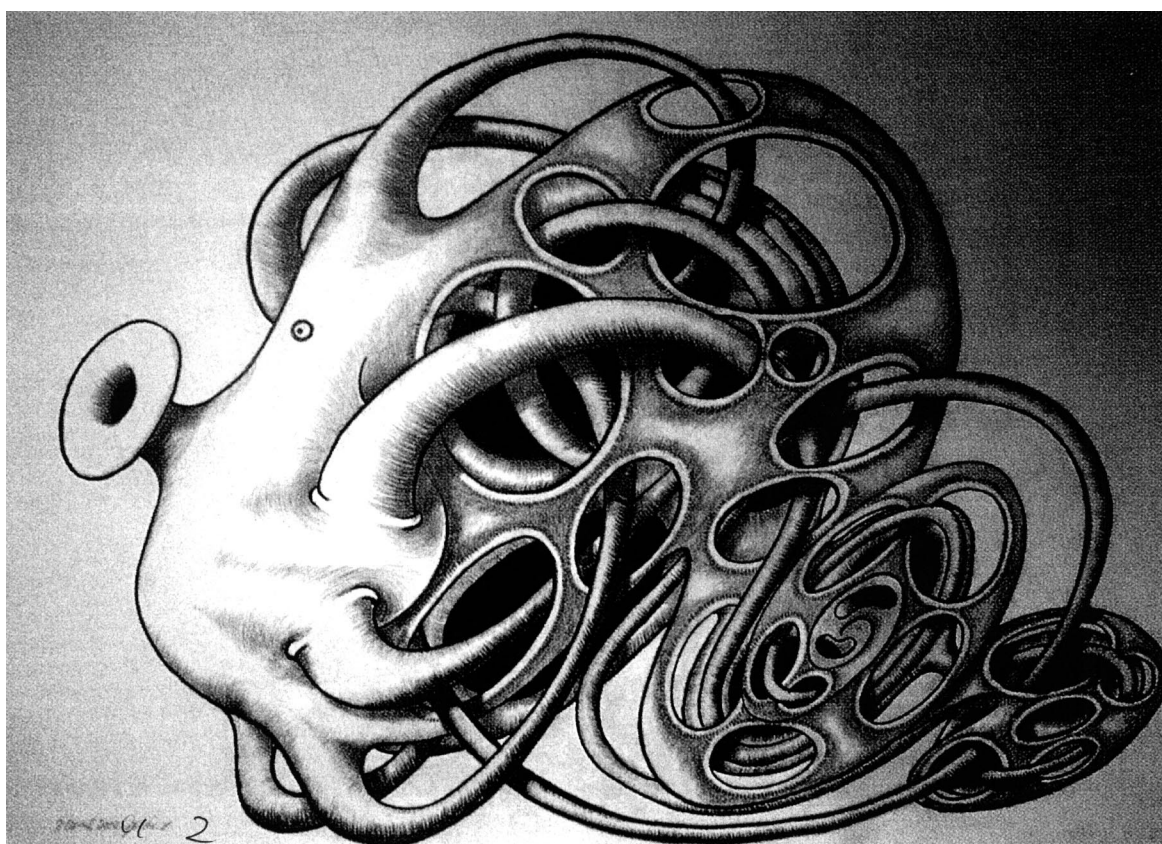
ジェモーション



原始のエギーボーイ



四次元生命体の図 1



四次元生命体の図 2